

---

# 低気圧と道化

暮菱葛葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

低気圧と道化

### 【Z-コード】

Z7225Z

### 【作者名】

暮菱葛葉

### 【あらすじ】

暮菱葛葉、高校生。

先輩、柊雪比等に連れられてやつて来た祭で事件と遭遇し、葛葉は親友の笹代涼風と共に捜査に繰り出す。

シリーズ第1話。



## (前書き)

あらすじに記載の通り、この小説は第35回関東信越地区文化発表会で配布される同名の小説に加筆・訂正したものです。

携帯では見づらくなるので、パソコン、改行倍率2倍が推奨です。

B.L.警告を付ける場合がありますが、形式上のものです。気にせずそのまま読んでくださいって構いません。

それでは、お楽しみください。

大人が「自分が若い頃は」だの「近頃の若い奴は」だの言ひ」とあるけれど、大抵は自分が若い頃に「自分が若い頃は」とか「近頃の若い奴は」とか言われてた訳なのでまともに聞いてあげる必要はないだろう。

そもそも今はあんたが若い頃とは違うのだからそんな時代錯誤な感傷には全く意味も価値もないのだ。

という話をしてみたら、雪比等さんは元々細い目を更に細めて、にはつと笑つた。

「葛葉、それってハツ当たりやんか」

一言で切り捨てられてしまつたけど、それはともかくとして。ハツ当たり。

まあ、ハツ当たりである。

八月の、夏祭。

今日の祭はクラスメイトの笠代涼風ささじるすずかぜと一緒に来る予定だつた（涼風の親戚がやつていてる露店とか、祭りを千倍楽しむ方法とかを教えてくれるらしかつた）のに、この馬鹿先輩に連れて来られて、挙げ句の果てに立ち寄つたたこ焼き屋のおつちゃんの昔話（おじさんの若い頃はね、恥ずかしくつてあんたらみみたいに彼女と一緒に祭なんて来れなかつたよー。最近の若い子は元気いいねえ）を聞かされたのだ。

怒らないはずがない。

まあ当然ながら、おつちゃんが若い頃、シャイボーリーだつたのが気に食わなかつた訳ではない。

大方おつちゃんは僕と雪比等さんは男性である。  
しかしながら雪比等さんは男性である。

僕も、人よりほんのわずかながら背が低いが、男だ。

隣にいる季節外れな名前の変人が、端正な顔立ちながらどの角度から見ても女性に見えない以上、導かれる結論は一つ、というわけだ。

いや、この場合、問題は服装か。

雪比等さんは、いつも通り後ろだけ長く伸ばした髪を紫色の紐で括っている。それに足すことの狐顔と、全体的に白っぽい服でなんだか怪しい宗教みたいだ。

「誰が怪しい宗教やねん」

それに対して僕は、なぜだか浴衣を着ている。雪比等さんが用意したもので、よく分からないが、罰ゲームなのだそうだ（いや全く意味が分からない）。白地に紅い金魚の柄（雪比等さん曰く、葛葉に似合ひやひ思て）の、可愛らしいデザイン。低い（この前測つたら百五十センチ後半だった）身長に加え、前髪が長いので、どうしても目付きが悪そうに見える眼鏡さえなければ、女の子に見えなくもない。

……いや、絶対に僕には似合わない。そう信じじよつ。

僕としては、即刻帰つてジャージか何かに着替えたいたのだが、さすがにそれは無粋だらうと自分でも思つので、『罰ゲーム』を続けているわけだ。

大体、祭りは数日続くんだから、明日とかにしてくれば良かつたのに。どこまでも自由な輩め。

こつちは約束ドタキャンして申し訳なく思つてゐるのだけど。

元々涼風は雪比等さんが嫌いらしいから、今頃僕を恨んでるだろうな。

苛々してきた。煙草でも吸おうか。

煙草を探そうとしたが、見つからない。ポケットを探さうとしたが、そもそもポケットがない。浴衣だから当然だ。

雪比等さんに煙草は没収されてしまったことを、今更思い出す。浴衣に紫煙は似合わないってことだらう。僕は高校生だから、法律を破つてることに対する『罰ゲーム』なのかもしれないけど。

煙草がないなら、仕方がない。歩きながら、わざわざ置いたこ焼きを食べる。

「つま」

腕は確かにおりやんだ。でも、なんで夏にたこ焼きなのだろ。暑いときに熱いものを食べにどうしていいのか。そりあんが食べたいな。

……やっぱり無料だ。

しかしあ、ここまで歩き続けるのだらう。ここでクリスマスメイトと遭遇してしまつたらと考へると、夏の暑さも引く暮菱葛葉であった。

「あ、暮菱」

聞こ覚えのある声。

遭遇してしまつた。

恐る恐る顔を上げる。

長めの髪で右耳を隠した、黒いTシャツにジーンズの男。笛代涼風だつた。

「あ、あわわ……」

狼狽うろたえてしまつたが、とりあえず誤魔化しを試みよ。

「……やあやあ涼風君、今日もいい天気だねつー」

「暑つてるけどな」

失敗だつた。

機嫌が悪そつだ。約束破つた僕（じやなくて雪比等ゆきひとう）が原因だけど。

「それより暮菱、何だよその浴衣

言つて、僕の後ろの雪比等さんを睨む。徹底的にこの人が嫌いらしい。

「ああ、最悪だ。

「ええやろ。あげへんでー」

涼風の怒りを気にせず僕の肩に手を回す雪比等さん。

……この人空氣読めないのだろうか。

つていうか涼風は雪比等さんと違つて健全な男子なので、こんな  
の見てもなんとも思わないはずだ。

あ、顔が真っ赤だ。本格的に怒つたらしい。

「似合つてねーぞ、それ」

そうか。自分でも思つてはいたけど、そつやつて面と向かつて言  
われると。

「そうかな。自信あつたんだけど」

勿論、似合つてない方の。一瞬の沈黙。

「……そうそう暮菱、面白いもんがあるぜ？」

面白いもん？

「こっち来い」

僕の手を掴んで引つ張る涼風。仕方なく付いて行くけど、こっち、  
僕達がさつき歩いて来た道じゃないか？

賑わう縁日を抜け、右へ曲がり、左へ曲がる。

「あれ、こっちじゃねーか？ 確か……あっちだな」

相変わらず残念な記憶力だな。僕も他人のことは言えないけど。  
だんだん人気がなくなつて、灯りも無くなつていいく。とうとう、  
真つ暗なところにたどり着いた。暗さに目が慣れていないが、どう  
やら河原らしい。

「……おいおい涼風、こんな人気の無いところに連れ込んで何する  
気？」

「なつ……なんもしねえよ馬鹿つ！」

そんなに怒鳴られることだらうか。暗さに目が慣れて、顔を真つ  
赤にした涼風の顔がわかる。

しかしそんな些細な認識は一瞬のこと

河原には全身が涼風の顔より赤く染まつた、さつきのたこ焼き  
屋のおっちゃんが横たわっていた。

「面白いって……。不謹慎だね、死体を前に  
そんなこんなで捜査中。

「いや、死んではねーよ。息してるし  
この血糊も、と続ける。

「ケチャップだぜ」

なんでケチャップが。

「なんかの祟りなんじゃねーの？ セイキ暮薺、このおっちゃんに  
恨みあるみたいこと言つてたし」

その話は歩いている道中でしたけれど。

そうは言つてもこれは由々しき事態だらう。犯人を捕まえるなり、  
それが出来ないなら警察を呼ぶなりするのが、善良なる市民の義務  
じゃないのか。

「だから、探偵するんだろ」

滅茶苦茶だ。下手をすればこいつは雪比等さんより勝手な奴かも  
しれない。

「いいじやん、名探偵さんよー。この前も殺人事件、一発解決した  
んだろ？」

「名探偵なんかじゃないよ。あれは、そう、まぐれだよ」  
あの事件は重い。

思い出したくもない。

それに、謎なんて無かつた。事件は事件でしかなかつたという、  
それだけのことだ。

「つったつて、この暗い中じやわかんねーか

わからない。

そうだ、わからない。

引っ掛けりが多すぎる。  
全てに解決が見えない。  
伏線なんか存在しない。

ああ。

煙草が吸いたい。

かちり

脳の中身が、スイッチを切り替える音。  
頭が冴えて、身体がふわりと浮く気分。  
全身から、毒が逃げていくような感覚。  
涼風が何か話しかけてくる。きっと僕は今おかしな顔色をしてい  
るのだろう。

涼風は何を言っているのだろう。  
すずかぜはなにを言っているのだろう。

そんな心配も。

完全に意識の外。

ふわふわりと浮上。

探偵編なんて存在せず、  
仮定も過程もすっ飛ばし、  
右にも左にも曲がらず、  
右往左往もしないで、  
糺余曲折すらなく、

「 わかった」

僕は

解答に、解決に、解明に、たどり着いた。

事実は小説よりも低次元。実際の事件に謎なんて無い。  
この謎はフィクションです。実際の世界、人類には一切関係ありません。

要するに、そういうこと。

誰かが策を練ろうと、必ず誰かに崩される。唯一絶対の世界の真理。

そんなことを思いつつ、涼風の手を掴んで神社裏まで連れて来る。  
「おいおい暮菱、こんな人気のねーところに連れ込んで何する気だよ」

決まつてる。

「『謎解き』だよ」

「早えーな。ミステリにはもっと伏線とか探偵編とか、いろいろ要るだろ」

「最大の引っ掛かりは、涼風が僕を連れて来たとき」

「おいおい、無視かよ暮菱さんよー」

無視だよ。

「僕達と反対から歩いて来たはずの涼風が、僕達が歩いて来た方向にある『面白いもん』を知っていた」

「皮肉な言い方だな」

続ける。

「それだけ気付けば、後は辻襷<sup>つじつま</sup>が合つ。いや、いじつけかな?」

「いじつけはダメだろ」

「これも無視。」

「別に推理小説じゃないから、簡潔に言つよ。」

犯人は涼風と、たこ焼き屋のおつちゃんだ

「……」

「おつちゃんが露店やつてる『親戚の人』なんだよね？」

「……」

返事がない。肯定だらう。

「そしたら謎なんて無くなる。おつちゃんが自分でケチャップ浴びて、涼風が僕を呼んで来る役。

そうだね、動機は……。

約束ブツチした僕への意趣返し、でビツヘ。」

「……おつちゃんの動機は？」

「だから、推理小説じゃないって言つたじやん。そこまで考えてない」

「おいおい」

「どう?」

「……」

再び返事が無くなる。

沈黙が痛い。

もしかして、間違つてたのだろうか。

す、と涼風が息を吸う音が聞こえた。

「……暮菱が男だつて後で気付いたんだよ」

「は?」

「だから、おつちゃんの動機」

「ああ」

性別誤認の仕返しに生死誤認、と。

ナンセンスだ。どこがシャイボーイだよ。

つていうか女装（言つてしまつた）については僕も被害者だから、仕返しなら雪比等さんの方にしてほしかつたな。

「これでいいが、全部」

重苦しい、苦々しい表情の涼風。

「やり過ぎだね」

「だな」

「食べ物粗末にしちゃいけないんだよ」

「だな」

「さつきから『だな』しか言ひてないよ」

「だな」

「……責任、とつてもうらうからね」

「だな。

……つて、責任?」

「僕の貴重な時間を奪つてくれた責任」

「……ど、どうじるど?」顔が赤い。ビラしたのだらう。変な奴

だ。

「じゃあとりあえず、明日は一緒に祭、来ようか

「……いいのか?」

「千倍楽しませてくれるんでしょう?」

「あ……ああ

嬉しいような、それでいて期待外れだつたような微妙な表情。

「よし、決定」

これにて一件落着。

とりあえず今日は帰つて、煙草でも吸おうか。

……がさり。

「くつずつはつ、何してるん?」

忘れてた。今日は雪比等さんと一緒にだつたんだ。

「こんな人気ないところで。一人きりで」「にやり。

なんとも形容し難い笑顔を浮かべる雪比等さん。

「あ、あわわ……」

「いつが。

「いつが全部悪いんだつ。

全ての元凶、終雪比等。

「……じゃあ、俺は帰るよ」

仏頂面で立ち上がる涼風。ちょっと待てよ。

「また明日、葛葉」

今なんか違和感がなかつたか？

涼風が帰つて、神社裏には僕と雪比等さんの一人きり。嫌だ。

「じゃあ、ホントの解決編やな」

「するんですか？」

「する」

さつきよりも厭な笑い方。

「つていうか葛葉、さつきの解決、なんにも証明できていやん」

「聞いてたんですか？」

「最初から。最後まで。名推理やなー」

茶化すように笑う。

「やっぱ禁煙したらええんとちやつ？」

「頭が冴えて仕方がないんですよ」

「そうやって才能封じ込めー」

「早速、一本吸わせてください」

「だーめ。今持つてへんし

はあ。この人は……。

「で、なんで涼風君が犯人や思たん？」

「なんとなくですよ」

「……」

「嘘です。ただ拳動不審だつただけです。あとは、さつきが言つた通り

「」

「要するに勘やろ?」

「観察眼です。煙吸わないと、頭だけじゃなくて、田も冴えるんですよ」

嘘だけど。

「……ふつと」

雪比等さんはそれきり黙つてしまつ。そのまま数十秒。

「うーんとな、犯人、涼風君やないし」

「は?」

「何で自分でケチャップ浴びんなねんな」

「もうですけど……」

「この人は、何かわかつたのだろうか。

「あのおつちやんが涼風君の親戚と違つことくらいやな」

さつきまでの笑顔が嘘のように、眉間に皺を寄せしわる。

「あれ、ホントに死んでたで」

「えーっと……」

「名推理やけど、不正解やな。」ないだの事件で調子乗つてると  
ちやうとう?」「

「そんなこと」

無いです、とは言えなかつた。

「じゃ、じゃあ、雪比等さん。犯人は? 解決は?」

「せえへんよ。僕、探偵と違うし」

「否定だけしに来たんですか」

「涼風君かわいそうやつたし」

「そうだ。」

雪比等さんが正しいなら、僕の解決が不正解なら、涼風は 。

「まあ、ええやろ。多分許してくれるで」

「はつ、といつものように楽しそうに笑つ。笑い事じゃないのだけど。

「でも、なら、犯人は野放しに」

「知つてゐ? この国には警察言つ機關があんねんで」

自分で書いたんだよ、と更に笑う。

「んで、これからどうするん?」

「さしあたり、警察を呼びます」

それが、偽物の名探偵の義務つてもんだらう。

所詮、こじつけは最新の捜査には勝てないのだから。

「そしたら、帰りましょう。結構遅くなっちゃいましたし

」

「なあ、葛葉」

僕の言葉を遮るように。

いつになく真剣な表情。

「なんですか?」

「涼風君のこと、どう思ってるん?」

「どうって……。別に、いい奴ですよ。

そりや、変なところもありますけど……」

「そか」

「それがどうしたんですか?」

お前本気でわかつてないのか、といつ顔をされる。

言つてはいけないことだつたか。

いや、と呴いていつも笑顔に戻る。

「なんでもあらへんよー」

「そうですか?」

とにかく。

明日は涼風と一緒に祭に行く。

そしたら、そこで謝りまつ。

きつと許してくれるはず。

お腹も空いたし、帰つてそつめんでも食べるか。

(後書き)

「低気圧と道化」、お楽しみいただけたでしょうか。

作者の処女作ですので、構成の不備とかは気にしないでください。  
誤字脱字があれば、報告をよろしくお願ひします。

とりあえず、シリーズ展開していくつもりです。

主人公の名前が作者と同じですが、深い意味はありません。よつて、そういうメタ的な展開もこの先ありません。ここで宣言しておきます。

では次作、または連載の続きでお会いしましょう。

追記

感想お願いしますほんとお願いしますできれば学外の方からも感想ください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7225n/>

---

低気圧と道化

2011年5月29日10時55分発行